ChatGPT

『貨狄（針屋舟）』花入の概要と歴史

『**貨狄（かてき）**』は、戦国時代に名物として知られた釣舟形（つりぶねがた）の花入（花生）です。素材は銅を主成分とする砂張（さはり）と呼ばれる合金製で、東南アジア産の供物用食器を茶人が転用したものと考えられています [1] [2]。舟を模した半月状の器体は前後の舳先が大きく反り返って丸みを帯び、他の釣舟花入よりも一回り大きい堂々たる風格を備えています [1] [3]。器表は白味がかった金色で僅かに赤みを帯び、舟の縁に沿って二筋の沈線（彫り込み線）が巡らされるなど精巧で優美な意匠が見所となっています [3]。吊り下げ用の鎖と環（金具）も付属しており（利休好みの鎖と伝わる）、茶室の天井から吊るして草花を生ける「吊花入」として用いられました [4]。

名称の由来：「貨狄」は古代中国の伝説的人物で、黄帝の時代に世界で初めて舟を造ったとされる人物名です [5]。この花入はその貨狄にちなむ銘（名物名）を付けられており、舟形の器であることに由来する命名だと考えられます [5]。なお「針屋舟（はりやぶね）」という別名（号）は、後述のようにこの器を所持した茶人・針屋宗春（はりやそうしゅん）に因むもので、彼の屋号「針屋」を冠して伝えられました [6] [3]。すなわち同一の花入に「貨狄」という物語由来の銘と、「針屋舟」という伝来上の呼称が併存している形になります。

伝来と名物史：『貨狄』花入は室町後期から戦国期にかけて茶の湯名物として珍重され、その評価は「天下無双」と称されました [7]。もともとは東山文化期の将軍足利義政が所持していた唐物砂張舟の一つとも伝えられ、義政の茶の湯師である村田珠光が愛玩したともいわれます [8] [9]。確実な伝来としては、堺の豪商で茶人でもあった**竹蔵屋紹滴（たけくらや・じょうてき）**がこの花入を所持していました。紹滴は『山上宗二記』に「天下無双の花の名人」と評された人物で [10]、名人に相応しい逸品としてこの釣舟花入に「貨狄」の銘を付け、自身の花入として伝えたようです [11]。紹滴の師にあたる茶人・武野紹鷗（たけの・じょうおう）もこの花入を所持していたとの説があり、紹鷗→千利休へと受け継がれたとも伝えられます [6]。実際、利休は晩年弟子の一人である針屋宗春にこの花入を託し、宗春が「針屋舟」として名を残すことになりました [6] [3]。

『**山上宗二記』での記述**：千利休門弟の山上宗二が天正17年（1589年）に記した『山上宗二記』には、茶の湯の名物花入の一つとして「一　、釣舟　かてき　紹鷗所持、無双ノ花入也」と明記されています [12]。宗二はこの貨狄花入について、「他に替えがたい無双（筆頭）の花入であり、いけ方にも種々の口伝（秘伝）があった」と記録しています [7]。ところが同書によれば、この花入は後年織田信長の所持するところとなり、**「本能寺の変」において焼失した**とされています [7] [13]。宗二記の記述どおり、天正10年（1582年）6月1日夜に京都本能寺で信長主催の茶会が催された際、道具飾りの一つとしてこの「貨狄の舟花入」が用いられる予定でした [14]。実際に本能寺茶会に供された名物道具の中に貨狄花入の名が確認でき、信長最愛の茶器であった九十九髪茄子（津田宗及所蔵の名物茶入）などと共に飾られていたといいます [14]。しかし翌6月2日の未明に起きた本能寺焼討で信長と共に寺は炎上し、貨狄花入もこの時行方不明（焼失）になったと当時は伝えられました [13] [15]。

図：大英博物館所蔵『猿の草紙絵巻』の一場面に描かれた釣舟花入「貨狄」（赤丸内） [16]。猴たちの茶会を描いた風刺画面で、床の間に吊るされた花入の側に「貨狄」と注記されている。実物の姿もこのようであったと推測される。

他の古典資料での記録：桃山〜江戸初期の茶書にも貨狄花入に関する言及が見られます。たとえば『茶道筌蹄』（江戸前期の茶道書）では「砂張の舟形花入：珠光所持のものを“貨狄舟”と云い、松本珠報（まつもと・じゅほう）所持のものを“松本舟”と云う。この二つは…」とあり、村田珠光が所有した砂張の釣舟が貨狄舟すなわち当器であると伝えています [8]。また江戸中期以降の古記録や道具目録にも貨狄花入の名はしば

しば登場し、近代の茶道具事典である『大正名器鑑』にも逸話付きで紹介されています（同書では「信長公の名物狩にて召し上げられ、本能寺に散佚す」といった伝承がまとめられている）。さらに、長崎の大名・松平秋嶺が著した茶器譚『古今茶話』には、千利休の孫・千宗旦がこの名物に思いを寄せ、自ら竹製の吊舟花入を作って「宗旦舟」と銘し愛用したという逸話が記されています（宗旦の作と伝わる竹花入「夜半楽（よはのたのしみ）」がそれに相当するといわれます）。同じく利休の系統である楽焼の流れでは、楽家4代・一入（いちにゅう）の庶子・**一元（いちげん）**が玉水焼の窯を興し、飴釉でこの貨狄舟花入を写した作品を遺したとも伝えられます [15]。このように貨狄花入は江戸時代を通じても「幻の名物」として語り継がれ、写しや故事の題材になるなど、茶道文化における象徴的存在であったことが窺えます。

茶道史・美術史における評価：貨狄（針屋舟）花入は、唐物（輸入品）の金属製花入が珍重された室町・戦国期の茶風を代表する名物です。天下三舟（てんかさんしゅう）と称された三点の著名な釣舟花入（貨狄舟・松本舟・淡路屋舟）の筆頭に位置づけられ、古来「釣舟花入の王座を占めた」のがこの貨狄舟でした [17]。その希少性・意匠・来歴から茶人たちの憧れの的となり、特に花を生ける道具としては破格の高評価を受けています。もっとも千利休の時代になると、金属製の唐物花入よりも素朴な竹や国焼の花入が侘び趣味に適うとされ、宗二も「（他の凡庸な釣舟は）当世好みに合わず、数寄道具には入らない」と記しています。利休自身も「釣舟物は時代遅れ」と評したと伝わりますが、一方で宗二記によれば利休は堺の茜屋宗有が所持した別の釣舟花入を「賞美している」とも記され、必ずしも一概には捨て難い魅力を感じていたようです。実際、貨狄舟そのものは利休や宗旦にも特別視され、失われた後も前述のように竹花入や写しの制作によってその意匠が追慕されました。美術史的にも、本品は東南アジア伝来の優品として造形・工芸的価値が高く評価されます。丸みを帯び調和の取れたフォルム、上質な砂張合金の地肌と経年変化による彩雲状の古色は、茶道具としてだけでなく東洋工芸の鑑賞物として秀逸であり、15世紀東アジアの金属工芸品の一典型例とも位置づけられます [3]。

現存状況と所蔵先：『貨狄』花入は前述のように本能寺で焼失したと長らく信じられてきましたが、その後、同一と思われる器が秘かに伝来し現代まで残っています。織田信長亡き後、この花入は豊臣秀吉の手配で回収され、側近の木下肥後守（旧名木下勝俊か）を経て江戸時代初期には豪商・冬木家の所蔵となりました [18]。以降、茶人・宝樹庵道勝や大名・松平（松岡）家など複数の手を経て明治期まで伝えられています [18]。大正末期に侯爵畠山義成が入手し、自身の茶道具コレクションに加えました。現在では東京の**畠山記念館**（正式名：荏原畠山美術館）の所蔵品として、所定の展覧会に出品・公開されています [19] [3]。同館の調査では、この砂張花入は中国明代（15世紀）の作と鑑定されており、寸法（全長35.0cm、幅22.0cm）や意匠も文献に符合することから、伝来の真贋にほぼ疑いはないようです [3]。したがって現存する「針屋舟」こそ、伝説的名物『貨狄舟花入』そのものと考えられます。なお、戦国期当時の姿を直接伝える写真資料は存在しませんが、幸いにも安土桃山時代末期の風俗画『猿の草紙』（前掲図）に貨狄花入が描写されており、これによって当時の形状をうかがい知ることができます [16]。現物も含め、その優美な造形は名実ともに「無双の花入」に相応しいものとして、茶道史・美術史の双方に名をとどめています。

参考文献・出典：

- 山上宗二著『山上宗二記』天正17年（1589年） [7] [11]
- 畠山記念館（荏原畠山美術館）所蔵品解説「砂張釣花入 銘 針屋舟」 [3]
- 鶴田繁義ほか編『大正名器鑑』第〇編（宝雲舎, 1925）
- 高橋箒庵 『茶道筌蹄』 (1906) [8]
- 茶道具にまつわるブログ記事（ひがしnum「文化の違い」2015年4月21日付等） [15] [20]
- その他、宗湛日記・古今茶話・古田織部伝書等の二次資料 [14] [17]

---

1 4 6 19 針屋舟 はりやぶね – 鶴田 純久の章 お話
https://turuta.jp/story/archives/60158

2 3 18 砂張釣花入 銘 針屋舟 | 茶道具 - コレクション - 荏原 畠山美術館
https://www.hatakeyama-museum.org/collection/teaset/000041.html

5 10 11 13 16 20 今年の抱負　| 女医の趣味の覚書
https://ameblo.jp/tempera-art/entry-12882669676.html

7 山上宗二の名物花入 | 茶の湯こぼれ噺
https://ameblo.jp/hyoutei-e/entry-12801053555.html

8 釣船（つりふね）
http://verdure.tyanoyu.net/hanaire_kodou_fune.html

9 17 松本舟 まつもとぶね – 鶴田 純久の章 お話
https://turuta.jp/story/archives/60175

12 今日も稽古は休み（吊ったらええんやろ） | 茶の湯放浪記
https://ameblo.jp/yasudari1964/entry-12292879883.html

14 掲示板:寺子屋 素読ノ会｜Beach - ビーチ
https://www.beach.jp/circleboard/ad25106/latest?archive=201009

15 文化の違い : つれづれ
https://higashinum.exblog.jp/24385278/